

夕闇がしのび寄り、太陽は足早にその姿を山の向こうに隠す。私の空腹も一緒に夜に染まっていく。

よく実ったしだれ柿の十字路を右に折れると、やわらかく光の灯った自宅の玄関が見えてきた。私は少し口元をゆるめ、白い吐息と共に「ただいま」と言いながら引き戸を開けた。

「おかえりなさい」

奥から萌子さんの声がした。幾秒かおくれて、ぱたぱたという足音とともに彼女が出迎えてくれる。

「ごめんなさい、遅くなりました」

「いえいえ、お勤めお疲れさまでした。寒かったですよ、お風呂が沸いていますよ」

彼女は目を細めながら、私の鞆を引き取ろうと近寄った。

ずるい

南風 こまち

ひと月ぶりだろうか。彼女が身にまとう衣服とそれを包む割烹着、その白さに似合わない黒焦茶の香りがする。焦げ臭く、それなのに奥行きのある甘い、そして少し潮から匂い。

どうかしましたか、と彼女は首をかしげた。私はそつと首を振り、風呂で冷えた体を暖めようと革靴を脱いだ。風呂から上がると、ちゃぶ台の上にはすでに夕食が並べられていた。

「今夜は鱈ですよ、近所の『あいはら』さんで安く売っていたんです」

裸電球の下で、こんがりときつね色になった西京焼きの脂がてらりと光っている。潮からい香りに空腹が深まる。

「萌子さんって煙草を吸うんですか？」

「えっ？」

私は萌子さんの真向かいに座りながら聞きなおした。同じ質問をくりかえす。

「さっき萌子さんの服から焦げたような匂いがしたので」「ああ、いえ、お魚を焦がしてしまって。私ったらそっかしくて」

少しだけおくれて彼女は返事をし、照れ笑いで頬を赤くした。

「焦がしてしまったものは明日、私のお昼にでもしようかと思えます」

彼女は手際よくビール瓶の栓を外し、私のコップに琥珀色の中身をそそぐ。

「珍しいですね、萌子さんはお料理が上手なのに」

私は彼女の手から瓶を受け取り、彼女のコップにビールを注ぎ返す。彼女はちいさく頭を下げて受け取る。一緒にひとつ結びにした黒髪が揺れた。

「では、いただきます」

「いただきます」

夜が更け、半月と星々が山の上に瞬く。

「萌子さん」

「あなた……」

しずかな夜だ。寝室の中に閉じ込めておきたい彼女のあえぎ声、互いの肉がぶつかり合う甘い音も、気を付けないとどこまでも遠くに届いてしまいそうだ。

もつと奥に、とせがまれる。それに応えるように、私は彼女の細いからだをきつく抱きしめる。小さくやわらかな彼女の唇に、その奥に私の舌をあてがい、絡める。お酒の香りが脳髄をとろけさせる。

首元に唇を移すと、きらりと互いの唾液が糸を引いた。そのまま髪に鼻先をうずめる。風呂上りの甘い女体の香りには混じりけがない。そう、あのむせてしまいそうな甘く焦げた匂いなんてないのだ。

お互いに登りつめた後は、重くなった体を下り坂にまかせ。先に坂を下りきるのはいつも萌子さんと、そっと起き上がったのは私に膝枕をしてくれる。

「きれいです、萌子さん」

「いえいえ、ふふ」

彼女の少し暖かい手が私の頭をなでる。少し細い指が私の髪をまさぐる。

でも、萌子さんは私のほうを見ているようでいて、その目はどこか遠くを見ているような気がする。

何を見ているんですか、とは聞けない。いつだって。

「……土曜」

「え？」

やっと、萌子さんの目が私を見てくれた。

「今度の土曜、どこかに出かけませんか。冬物のストー
ルが欲しいって言っていたじゃありませんか」

彼女は少し目を瞬かせた。

「いいんですか？ お仕事、忙しいのではありませんか？」

「いえいえ、いいですよ。仕事なんてそんなもの、どうにでもなります」

私が微笑むと、彼女もおだやかに笑って「じゃあ、お言葉に甘えて土曜日に」と言ってくれた。

しばらくすると、思い出したかのように冷気が皮膚を撫でる。熱っぽかった余韻はいつしか、霧のように消えてしまう。

「すっかり夜も冷えるようになりましたね」

萌子さんは豆電球の薄明りの中で、みだれた布団を直しながら言う。ええ、とだけ生返事をして私は天井を見上げる。

「萌子さん」

「どうしました？」

私はむつくりと布団の上に起き上がる。

「……もう一度、いいですか」

彼女はちよつと驚いたように返事をためらい、やがて聞き分けの無い子供をさとすようにこう言った。

「だめですよ、明日もお早いでしょ？」

私はそれ以上求めず、大人しく布団をかぶった。布団は湯たんぽで暖められていたはずなのに、確かに隣で寄り添う萌子さんの四肢は暖かいのに、ねむりに落ちる私にはどこか冷たく感じられる。

隣でねむる萌子さんが、どこか遠くに行ってしまうような気がして。彼女はどこにも行かないと、そう信じているはずなのに。

翌朝、私は桶崎社長に呼び出された。社長は窓の外を見ながら煙草をふかす。

「海田くん。見合いの話が来ているのだが」

まただ。……お見合いについて萌子さんには話してない。

「先方を待たせ続けるのも良くない、分かるだろう？」

君ももうすぐ四十路が見えてくる。この辺で身を固めるのはどうかね？」

社長は窓の外から目を離し、私に向き直る。ここでした返事はそのでっぷりと突き出た腹に収まるのかもしれない。

ない、と不埒なことを考えてしまう。

「申し訳ございません、私はそのようなものには……」

二言三言のお小言を受け、私は社長室を後にした。

社食は混んでいて、私は昔馴染みといっしよに会社裏の定食屋に向かった。

「……で、また桶崎のチャーシューに見合いを勧められたのか。あいつも懲りねえよな」

「相変わらず口が悪いですね、柳山さん」

「お前がお高くとまっているだけだ、男のくせに気味が悪い。おやつさん、あつい茶をくれ。うんとあつくしてくれよ」

彼はまた湯のみを空にする。昔から早食いな彼はとっくに酢豚定食を食べ終えて、キャメルを半分くらい灰にしている。

「で、相変わらず色っぽい話は何もねえのか」

口では知らないふりをしつつ、彼の吊り目は萌子さんのことに興味津々でひかっていた。人の恋路をひやかすのが彼は昔から好きだ。

「……柳山さん、あなたは煙草を吸いますよね？」

「煙草お？ 見りや分かるだろ。どうした、藪から棒」

に」

私は餃子にたっぷりと辣油をつけ、口にはこぶ。涙目になりながら事の次第を話した。

「……海田は煙草を吸わん素人だから断言はできませんが、萌子さんつつたな？ 潮からいつのが分からねえが、それを除外すればその人の吸う煙草はロングピースじゃねえか？ 重い煙草で誰が吸ってもむせる、女はとても

吸わねえぞ。ましてや萌子さんとやらは煙草を吸う様子はねえんだろ？ 妙だな……」

きたない灰皿で短くなった煙草の火をもみ消しながら、ああでもないこうでもないとして柳山さんは考えを巡らす。私は黙って耳を傾けながら、ぬるい茶を口に含む。口の中の辛味が少しづつ退いていく。

「ひと月くらい前にも似たようなことを言っただけでなかったか？ 彼女から煙草の匂いがあるって」

記憶をたどる。彼女の甘い香りが思い出され、その後追いをするように煙草の匂いがよみがえる。あついで茶が運ばれてきて、柳山さんは冷ましてもせずに口をつけた。

「もしそうなら、萌子さんは月に一度煙草を吸うことになる」

「煙草を吸う頻度ってそんなものですか？」

「いや、普通はもっと頻繁に吸うだろうな。人によるだろうが」

また皿が運ばれてきた。柳山さんは平皿に盛りつけた焼牡蠣に箸をつけ、私に聞く。

「あいつとセックスして、キスするだろ？ その時に煙草の匂いはしたか？」

「つよく首を横に振る。」

「一本だけだとしても、肺に入れた煙草の匂いは口や体からは簡単には落ちん。でもほぼしなかった。ってことは、だ。煙草の匂いは服だけについていたってことになる。彼女は吸っていない、だが服からは煙草の匂いがする。どういう意味か分かるか？」

私は茶をおおった。

「私以外の誰かと……ということですか？」

「まさかとは思うがな、確かめたほうがいいんじゃないかねえか？」

私は返事をせず、湯気のたつ焼牡蠣を口にはこぼ。いっになく肝が苦かった。

「土曜の街は人が多いですね」

萌子さんは私の横を歩こうとするも、人波に負けて私のうしろを歩きながら言った。離れないで、と私は彼女に手を差し伸べた。小さくて暖かな手だ。

百貨店が近付くにつれて、人波はますます私たちに逆らうようになってきた。私は萌子さんとつかず離れず歩きつづける。

どこからか風に乗って、甘く焦げた匂いがした。

ふっ、と手のぬくもりが消えた。

「萌子さん？」

振り向くと、萌子さんは立ち止まっていた。周囲をきよるきよると見回しながら。

「萌子さん」

誰かを探し求める目は、私の声が届いても変わらな

い。

「あつ……ごめんさい、少しぼうつとしてしまつて」

煙草の匂いはとうになく、彼女は何事もなかったかのように歩きはじめる。

「どうかしたんですか？」

たまたまに聞いてしまった。でも、聞くべきではなかったのかもしれない。

「いえ、何でもありませんよ」

少し、ほんの少しだけ遅れた彼女の返事。それと同じくらい、ほんの少しだけ私の足取りは重くなった。

婦人服売り場でストールを取り扱う一角を見つけると、萌子さんはちよつと目を輝かせた。若草色、柿色、銀杏色。どれにしようかしら、とゆつくりと首元にあてがっていく。

しかし、どうしても彼女はどこか心ここにあらずなように見えてしまう。勘ぐりすぎだ、いくら自分にそう言い聞かせつづも。

「……さん、晴夫さん」

「えっ？」

ちよつとふくれつ面をした彼女の声で我にかえる。

「もう、ぼんやりしてどうしたんですか？」

「い、いえ、その……」

心ここにあらずなのは私のほうか。何でもありませんよ、とごまかしながら自嘲めくしかない。

「あつ、これなんかどうですか？」

話題を変えようと、私はとっさに棚の片隅のストールを手取る。たまたま目に入ったそれは、細かい糸糸で編まれた淡い桃色の首巻。鏡のまえで、萌子さんの首元にそつと巻いてあげる。まるで冬を飛び越して春が来たみたいだ。

「とても似合っていますよ、いつも以上に顔色が良く見えます」

萌子さんはだまつたままじい、と鏡の中の自分を見つめる。そして、目を細めながら「これにします」。

会計をすませ、彼女は嬉しそうにストールを紙袋から出し、いそいそと首元にまとう。

「ありがとうございました、あなた。大切にしますね」

＊

春を切り取ったかのようなストールを首元に、寿司やではやめの夕食にした。百貨店を出て駅で電車を待つころには、ホームの上に鶯色の夕焼け雲が見えていた。

「明日あたり霜が降りるかもしれませんね」

すっかりくらくらなくなった最寄り駅からの帰り道、萌子さんは言った。夜闇の中でもストールの色は暖かそうだ。煙草の匂いはしない。

「萌子さん」

もうすぐ家に帰り着く、その直前で私は彼女を呼びとめた。「はあい？」と萌子さんは振り向いた。

「……また行きましよう」

彼女はやさしく微笑んで、「ええ、そうしましよう」とだけ言ってくれた。

彼女は……萌子さんは、なぜあの煙草の香りを探しているのだろうか。なぜあんなにさみしそうなのだろう。

＊

霜が毎朝のように降りるようになり、天気が悪いと雪がちらつくようになった。

「有給？」

桶崎社長は少し渋い顔をして聞き返した。

「……まあ、海田くんは普段から頑張ってくれているし、成績もいい。いいだろう、ゆっくり羽を伸ばしてきたまえ」

「ありがとうございます」

私は深々と頭を下げた。あと十年もすればこの髪も真っ白になるだろう。その時、あの人はとなりにいてくれ

るだろうか。

「そうだ、海田くん。また縁談が来ているのだが」

私は首を横に振った。

「申し訳ありません、有給明けにしていただけですか」

社長は不思議そうに、そして少々の不機嫌を滲ませながら禿頭をかしげた。

「……どうしたのかね、普段の君ならお茶を濁すばかりじゃないか」

私はこう返事をして、社長室を出た。

「確かめたいことがあるんです」

＊

二日、三日と時間を無為に過ごした。あついコーヒーを手に新聞を読みつつ、駅へと続く大通りを見下ろす。新聞を読み終えたら喫茶店のマッチを弄びながら、日暮れを待つ。

どんよりとした曇り空の四日目、動きがあった。駅に向かう小さな人影、それは見紛うことのない春色のストールを巻いていた。私はあわてて会計を済ませ、駅へと小走りで向かう。溶けた霜に、足音がびちゃびちゃと響いた。

駅前から彼女はバスに乗った。私は気付かれないようにタクシーを拾い、バスを追った。

バスは停留所に着くたびに客を乗せては降ろし、乗せては降ろし。段々と街をはなれ、岬の方に向かっていく。錆の浮いたバス停を過ぎるたびに、少しずつ潮の香りが強くなる。

結局、萌子さんが降りたのは終点の漁港に近い灯台の前だった。そのまま灯台のほうへと向かっていく。タク

シーを捨て、私もそつと後を追う。

灯台横の小道は海のすぐ手前の岩場へと続いていた。

海は荒れ、遠くの堤防に当たっては轟音と共に白く砕けている。

冷たい海風が彼女の二つ結びを引きちぎらんばかりの勢いで吹き荒れる。彼女はそんな中、巾着の中から小さな箱を取り出した。

煙草……？

私のつぶやきは風にかき消されたみたいで、萌子さんはまるで気付かない。煙草を口にくわえ、紅をつける。そして、見覚えのない銀のライターで火をつけようとする。オイルが少ないのか、なかなか着火しない。

喫茶店でもらったマッチをポケットから取り出し、私は彼女に近づく。

「はい、萌子さん」

マッチに火をともし。風で危なっかしげに揺れる赤い火が、驚いて振り向いた彼女の瞳に映り込んだ。

＊

萌子さんは煙草を軽く一口だけ口にふくめ、肺には入れなかった。それでも涙目になってむせた。煙草の先から立ち上る煙は、嗅ぎ覚えのある甘く焦げた匂い。風に乘って気まぐれにその向きを変える。

「すみません、後をつけてしまつて」

萌子さんはだまって目を伏せた。

「ロングピースなんて吸うんですね、知りませんでした」

満ち潮が近付いてきたのか、さつきよりも海が近い。こまかい波しぶきに混じって雪が舞い始めた。

「私が吸うんじゃないんです。……いなくなった恋人が吸っていたんです」

ほんの少しだけ灰になったロングピース。吸い口に紅がついたそれを、萌子さんは足元の岩の間にはさむように立てた。甘く焦げた紫煙は線香のように立ちのぼり、どんよりした空と荒れた海の間に消えていく。

「数年前に海難事故でいなくなりました。死んでしまったとは思いません、どこかで生きていますはずだって……あの人は、よくこの煙草を吸っていたんです。だから、この煙草の煙を目印に帰ってきてくれるんじゃないかって……」

線香はじりじりと短くなっていく。

「だから、あの人がいなくなった日に毎月来ているんです。灯台の光ならどこからでも見えると思って」

私の知らないイニシヤルが刻印された銀のジッポウライターを見つめながら、彼女は言葉を止めることができない。

「馬鹿ですよ、私……分かっていきます。あなたもいるのに……でも、でも忘れられないんです。どうしてもこの煙草の匂いを探してしまうんです、あの人のことを探してしまうんです。あの人は生きていると思って、手を合わせることもためらってしまっています」

雪と海風で冷え切ったライターにほたり、と雨粒が落ちた。萌子さんは忘れ形見を巾着にしまい、そっと手を合わせる。

私は手を強張らせた。今すぐに巾着の中にある煙草をひたたくって吸ってむせて、とにかくロングピースの甘く焦げた匂いを自分のものの上書きしてしまいたかった。今すぐその見知らぬライターを思い切り岩場に叩きつけて踏みつけて、ぐしゃぐしゃに壊してしまいたかった。

た。

でも、できない。

どうしても、できない。

そのロングピースは、そのジッポウライターは、彼女の宝物であり、過去であり、証であり、呪縛であり、そして……でもあるのだから。

潮風が一段と強くなり、短くなった煙草が宙に舞った。紅の残像はやがて鉛色の海に消え、潮の香りの中、甘く焦げた匂いだけがわずかに残された。

また波しぶきが舞う。

私と萌子さんの目の前で。

私のとなりで。

春は、遠い。

半月は雲の中にかくれている。

帰宅して、夕食もそっちのけに私は萌子さんを押しなおした。でも、いつの間にか形勢逆転され、私は下から彼女の両手をぎゅうとにぎり、彼女の腰の動きに合わせていった。

「ごめんなさい……ずるい女だって分かっています」

「え？」

彼女は腰に力を込め、私は快感でうめいた。

「あなたを好きになって、あなたのとなりにいれば、あの人のことを忘れられると思ったのに……あなたにめちやくちやにしてもらえれば、あの人のことを忘れて楽になれると思っただけ……でも、楽になりたくてあなたを選んだんじゃないのに……心の底からあなたを愛しているのに……ごめんなさい……ごめんなさい……！」

萌子さんはそのまま腰を強く上下させながら、うわごとのように謝り続ける。

「萌子さん……！」

私のあえぎと彼女の歓声が交錯し、絶頂。少しして緊張がほどける。彼女は身体をほてらせながら、どきりと私の胸板にくずれ落ちた。

「萌子さん……」

「はい……？」

お互いの荒い吐息がゆっくりと静まっていく。

「忘れなくてもいいんですよ」

彼女の頭に手をのびし、撫でる。

「ずるくてもいいんですよ」

そのままさらりと一つ結びをほどく。

「ですが……お願いです、どこにも行かないでください」

ほどいた黒髪から女体の香り、そして淡くロングピースの匂い、海の匂いがある。

「私はもう、あなたのことを忘れられません」

私もずるい男だ。

ここでせがめば、萌子さんはどこにも行かないと約束してくれるだろう。

今まで籍も入れず、かといつて見合いとかもしぶり、どっちつかずで生きてきた。

そんな半端な自分に萌子さんを責めることは、できない。

「あっ、やん」

ごろり、と私が上になる。

「もう一度、いいですか」

少しの間おいて、萌子さんは微笑んでくれた。

「はい。どこにも行きませんから……どうぞ、何度で

も」

そう言って少し赤くなった目を閉じ、私の唇を待つ。
煙草を一口含んだくらいでは、彼女の紅は染まらな
い。染まっても、染まっていない。

「私も、萌子さんと同じです」

片頬に、片耳に、片側頭に。彼女のしっとりとした太
ももを感じながら私はつぶやく。

半月が雲から顔をのぞかせ、障子紙がほんのりと明る
くなる。

「私も、ずるい男です……」

萌子さんはさみしそうな微笑みを浮かべ、細い指で私
の髪を優しくまさぐる。

「ずるくてもいいんですよ、ね？」

夜明けころに、また霜が降りるだろう。

切り取られたスカーフの残りが街を包む頃、私は萌子
さんと籍を入れた。

やがて子供も幾人かできて、みな成人し、その頃には
私の髪は真っ白になっていた。

そんな今でも時々、そう、月に一度くらいだろうか。
彼女はお魚を焦がしてしまふ。

私はいつも、その匂いに気付かないふりをしてしま
う。

あとがき

当初、この作品のタイトルは『忘れ形見』にするつもり
でした。しかし書き進めるうちにしっくりこなくなっ
て、やめました。『霜』とか『スカーフ』とか『遠い
春』とかも考えましたが、みんなはずれでした。『ずる
い』でようやくニアピンでしょうかね。

ふだん、私はかつちりとした文章を心がけています。
推理小説を書くことが多かったからでしょうか、正確で
ゆるぎなく情報をつたえようと腐心していました。私の
性にもあっていたみたいで、あまり苦労することなくす
るすると文章が書けていました。

今回はふにやふにやな文章をめざしましたが、むずか
しいですね。ああでもないこうでもない、漢字をひら
がなにしてみたり、文章を入れかえてみたり。答えのな
いジグソーを解くみたいでした。答えがなくても、答え
をださないといけない。生きることと似ていますね。

成人向け指定をかけるかどうか迷いましたが、編集さ
んから相談があったら指定をかけようと思います。なか
つたらこのままです。

構成も何もありません、ただしっとりした作品をめざし
たくて筆を走らせたのははじめてのことです。それでも
作中でおかしなところが出ないように気をくばってしまっ
たのは、長らく三文で書き続けるうちにしみついてしまっ
た「わたし」なのでしょう。

最後に、ロングピースについて教えて下さった小田た
つえ先生と、編集の方、そして読者のみなさんにお礼を
申し上げてしめにします。ありがとうございました。